

アオくてすれ違う日々

扇町グロシア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

色々と、すれ違うものです。

男の子と女の子、天地ほど違う生き物ですから。

でもま、どうにかなるもんですよ。

目次

アオくてすれ違う日々

1

アオくてすれ違う日々

正直、どこかに恐れはあったと思う。何としてでも日本に残りたい、でももう鹿野家は海外移住の為に手放す契約になっていて。お母さんが英明学園にいたころのチームメイトで今でも年に何度か連絡を取る友達、という限りなく赤の他人としか思えない縁の人が私を預かってくれるのは、とつても有難いのだけれども。……一個下の男の子がいると聞いた時は、結構不安になった。……いやだって、男の子ですよ。私そりや色気もへつたくれもないけど、男の子って……オトコノコだし。

もしその家が猪股家でなかったら、その家の男の子が私の背中を押してくれた「いのまたたいき」くんじゃなかったら。私は結局、日本に残れなかっただろう。だから、感謝してる。大喜くんで、良かった。

……良かったんだけどねえ。うん。大喜くんは、どうも……鈍すぎやしないだろうか。幼馴染みだつていう蝶野さんが結構露骨に好き好きオーラ出してるのに、気付く気配が全くない。私だって憎からず思つてはいるし、なんなら好きな方だけど、どうもそれが伝わっている気配もない。ちよつとくらい勘違いするくらいがオトコノコっぽいのに。

笠原くんと妙に仲良いし、そういう子なのかなーとも思ったけど。……でもたまーに、見てるんだよねえ……私の胸元とか。興味は、あるんだろうな。それはまあお互い様だろう。私だって、オトコノコに興味がないとは言わないし。今はバスケ優先ってだけで、いつかそういう行為もするんだろうなーどんなかなーとかは思わない訳じゃない。

まあ、安全な環境なのは、良いことだ。うん。きつと。

……と、思っていたのだけれども。

「えーと、ねえ……。うーん……」

綺麗な土下座をした大喜くと、それを見下ろす私。その間には、洗濯物から姿を消していた、水色のセツトアップランジェリー。……うん。こういう事もあるかと思っていたけれども。

さすがに猪股家のおばさまに汚れ物を預けるのも気が引けるから、私は自分の洗濯を全部自分でやっている。だから他と混ざって何処かへ入るなんて、まず有り得ない。消えた時点で大方の見当が付いたから、聞いてみたらこの通りだ。いやまあ、そんな高いものでなし。欲しかったらあげても良いんだけど。……良いんだけど、ね。

「あー……、オトコノコだもんね。でもね、こういうことはさ……」

「……先輩を、そういう目で見ちゃいけないのはわかってます。でも、我慢できませんで

した」

いやいや、ちよつと違う。私をどんな目で見ても良いけど、人のものは盗つちやダメつて話なんだけど。……どうも大喜くんは、一度方向が決まるとそつちしか見えなくなるらしい。弱つた、どうしよう。下手に何か言つても言わなくても、勝手に話が拗れるやつだ。変に色々考えさせるより、スパツと終わらせるべき案件だ。

「大喜くん、私は怒らないし騒ぎにもしないよ。ただ、……しちやう前に、話してほしかった。欲しいなら欲しい、見たいなら見たいつて。したいことがあるなら、そう言えばいいよ。私はよつぽどの事じゃない限り、怒つたりしないからさ」

「先輩……」

土下座したまま、大喜くんが嗚咽を上げ始めた。……やつぱり色々勘違いしてそうだけれど、とりあえずここで終わらせよう。

「じゃあ、これでお仕舞い。ね、後はいつも通りに戻る？」

そして土下座も早くやめてほしいのだけれど。もし誰かに見られたら、この絵面を上手く説明する自信がない。

……結局そこから数十分かけ、ようやく大喜くんは泣き止んで土下座をやめてくれた。オトコノコつて、大変だ。心の底から、そう感じた。

オトコノコは面倒だな、とやつぱり思う。色々と違いすぎる。身体も、心も。だから

そう、余計な事を言うもんじゃないな、と私が改めて思ったのは、あれから少し後。大喜くんのインターハイ出場が決まる、その日の朝だった。

「先輩、お願いがあります」

真っ直ぐな目で、大喜くんは言ったのだ。もし勝てたなら、インターハイに行けたなら、

「先輩と、キスしたいです」

……そう、淀みなく言いはなつた。いやね、言いましたよ。確かに、したいならしたいって言えつて。でも、このタイミングでそれを言うか。そこまで大したものでも無いだろうに、キスくらい。私だってしたことないし、価値は分からないけどさ。

「……うん、良いよ」

それが大喜くんにとって奮起する理由になるなら、構わないだろう。

……とまあ、思いはしたけれどもさ。

「あー……おめでどう」

本当に勝って凱旋しくさつたのを見届けると、祝いながらも呆れてきた。いや、他にも理由はいっぱいあるだろうけど。つい今朝あんな事を言うもんだから、キス目当てで勝つたようにしか見えない。

でも、とにかく。約束は、約束だ。大喜くんの前に立ち、顎を両手で包み込む。ごつ

ごつとした感触と、思ったより肌目の細かい肌。震える唇。……頑張った、大喜くんは頑張った。だから、約束通りに。

「んっ……」

僅かに首を傾げ、唇を重ねる。甘く柔らかな、熱と吐息が混ざりあう。気持ちいい、粘膜の接触。身体の奥が、真っ赤に燃え上がっていく。これは、——不味いかな。大喜くんへの御褒美じゃなくて、私が一方的に、……欲しくなりそうだ。猪股家へ来てからは気になってあまりシてないし、ここはもういつそのこと——

と覚悟を決めた矢先。

「先輩、ありがとうっ、ございます……っ」

……大喜くんは身体を離し、涙を浮かべて私に感謝した。

え、いや。ちよつと待て。ここで終わるつて何さ。いや大喜くん、良いよ!? 今私、このまま最後までイケる気分だよ!? チャンスだよ!?

オトコノコって、オトコノコって! 本当に、分かんない……。

それから、日々は過ぎていった。相変わらず、大喜くんは分からない事だらけだ。変に頑固だったり、かと思えば欲望に一途だったり、勘違いで突っ走ってみたい。でも、それはそれで、楽しい。オトコノコというものも、少しずつわかってきた気もする。

そうだ、今度は大喜くんにオンナノコってものを教えてあげるのも、悪くなさそうだ。

どんな顔をするか、楽しみ。
きっと、良い顔で困るんだらうな。
さて、どうしようかな。